

指定文化財一覧

区	名 称	所 在 地
国	大学三郎御書（日蓮筆）	平 賀 本土寺
	諸人御返事（日蓮筆）	
	梵鐘（建治四年銘）	
	木造金剛力士像	
県	富城殿御返事	馬 橋 万満寺
	本土寺過去帳	
	銅透彫華篋	
	旧徳川昭武家別邸庭園	戸定が丘歴史公園
	浅間神社の極相林	小 山 浅間神社
市	松戸の万作踊り	二十世紀が丘梨元町 二十世紀公園
	二十世紀梨誕生の地	
	松戸の獅子舞	
	高城氏の墓所	
	本土寺	
	秋山夫人の墓所	
	高城・原氏等判物	
	桂林尼の墓所	
	太鼓	
	幸谷観音野馬捕りの献額	
	阿弥陀如来立像	
	寛政七年小金原御鹿狩り絵図	
	金龍山一月寺旧蔵 木造普化禅師立像 他	
	木造不動明王立像	
	鑄造魚藍観音立像	
	阿弥陀如来座像	
	豊臣秀吉の制札	
	一月寺遺石	
	寛文元年銘道祖神	
	鉦鼓	
	阿弥陀三尊仏	
	慶安三年銘庚申塔	
	経世塚	
	徳川昭武関係資料	
	庚申板碑	
	寛文八年銘庚申塔	
	嘉永五年銘庚申塔	
	河原塚1号古墳	
	河原塚4号古墳	

メ モ

「歴史の散歩道・松戸駅から矢切の渡しコース」

編集・発行 松戸市教育委員会 社会教育課

〒271 千葉県松戸市根本356

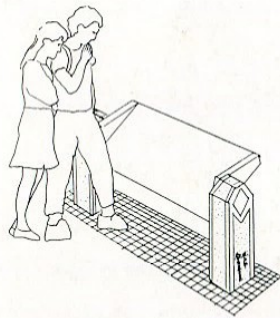
☎ 0473-66-7462

発行日 平成5年3月31日

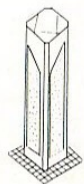
歴史の散歩道

松戸駅から矢切の渡しコース

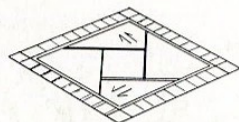
案内板



コース標識 (1)



コース標識 (2)



歴史の散歩道コース紹介

◎ 松戸駅から矢切の渡しを歩くコース ◎

松戸駅西口＝松戸神社⑤＝戸定が丘歴史公園（戸定歴史館・旧徳川昭武家別邸庭園）⑥＝浅間神社の極相林⑩

＝矢切の斜面林＝矢切の渡し⑮

野菊の墓文学碑（西蓮寺）⑫

矢切庚申塚⑭＝北総矢切駅

◎ 散歩道ワンポイントアドバイス ◎

1. 一般の道を歩くコースです。車等に注意して歩いてください。
また、大声を出したりして周りに迷惑をかけないようにしましょう。
2. 文化財には一般に公開されているものと、非公開のものがあります。文化財の所有者に迷惑のかからないように散策しましょう。
3. 自然も大切な文化財です。むやみに動植物を採らないでください。無意味な殺生は生物の生活環境を破壊するだけです。
4. 自分の足で歩く散歩道です。体調や天候に注意して歩いてください。無理は禁物です。
5. 時間や季節を変えて歩いてみてください。街の景色も時間や季節によって変化します。同じ場所でも様々な景色が見られます。

松戸市は千葉県北西部に位置し、面積61.3km²、人口46万人を擁し、県内3番目の都市です。

松戸という地名については、平安時代^{すがわらのたかすえ}菅原孝標^{むすめ}の女が書き記した「更級日記」の中に〈下総国と武蔵国の境『ふとい川』(今の江戸川)のかみの『まつさととのわたり』の港で泊った。〉という内容の一節があります。この『まつさと』が現在の松戸のことではないかとされています。

松戸市内には、いまから2万年以上前(旧石器時代)から人が生活していた痕跡が見つかっています。約1万3千年前に始まる縄文時代には、最後の氷河期(ヴェルム氷期)が終わります。気候が温暖化してくると動物や植物が繁殖し、人が住みやすい環境が整ってきます。特に東京湾沿岸(神奈川、東京、埼玉、千葉)の地域に数多く遺跡が発見されており、縄文銀座と呼ばれています。松戸市もこの一画にあり、幸田貝塚^{こうていかいづか}、東平賀貝塚^{りがしひらがかいづか}、貝の花貝塚^{かい はなかいづか}などの全国的に有名な貝塚をはじめ100ヵ所以上の遺跡があります。

中世(鎌倉・室町時代)には千葉氏の勢力下に入りますが、その後高城氏^{たかぎ}が興り、根木内城^{ねぎうち}や大谷口小金城^{おおやぐちこがね}などが築かれました。また、この時代には小金に本土寺^{ほんどじ}、東漸寺^{とうぜんじ}、馬橋には万満寺^{まんまんじ}などが建立されました。これらの寺院には、仏像や古文書などたくさんの文化財が保存されています。

江戸時代には水戸街道の宿場町として栄え、多くの旅籠^{はたご}がありました。また、江戸川沿いには河岸ができ、銚子方面で水揚げされた鮮魚を江戸まで運ぶ中継地として賑わいました。

明治時代になると小金牧^{こがねまき}(徳川幕府直営の野馬放牧場)の開墾が始まり、五香六実^{ごこうむつみ}の地名ができました。江戸川には橋が架けられ、鉄道も開通しました。戸定邸^{とじやうてい}が建設されたのもこの時代です。

昭和18年に市制が施行され、昭和30年代の高度成長期に人口が増加し、現在に至っています。

松戸にいた剣豪たち……^{あきり またしちろう}浅利又七郎^{ち ばしゅうさく}と千葉周作

浅利又七郎は1778年(安永7年)^{あんえい}松戸近在の農家に生まれたといわれています。

江戸に出て、小野派一刀流^{おの は いっとうりゅう}中西忠兵衛^{なかにしちゆうべえ}の道場で修行し、突きの名手として知られていました。20代後半には免許皆伝を受け、江戸でも有名な剣士の一人に数えられるまでになりました。

やがて、松戸に住んでいた旗本喜多村石見守^{きたむらいわみのかみ}の家に剣術師範として出入りしていた縁から、若狭国(福井県)^{わかさのくに}小浜藩^{おほま}の剣術師範に迎えられました。

江戸と松戸を行き来していた又七郎でしたが、喜多村家の世話で松戸に居を構え、道場を開きました。入門者も多く、いつも竹刀の音が聞こえたといいます。その入門者の中に若き日の千葉周作がいました。

千葉周作は1794年(寛政6年)^{かんせい}に陸前国(宮城県)^{りくせんのかみ}で生まれ、幼名を於菟松^{おとまつ}といいました。

7歳のころから家伝の北辰流^{ほくしんりゅう}を父忠左衛門(幸右衛門)^{ちゆうざえもん}から習い、小さいころから才能を発揮しました。

周作が15歳の時、一家は松戸に移り住み、忠左衛門は名前を浦山寿貞^{うらやましひてい}と変えて医者として生活を始めました。時には馬の診療までしたので、馬医者とも呼ばれたそうです。



浦山寿貞の墓

忠左衛門は剣術師範をしたこともあったことから浅利又七郎との交流が生まれ、周作を浅利道場に入門させたのです。

もともと剣術の心得のあった周作ですから、またたくまに腕を上げ、師匠をしのぐほどになりました。やがて、又七郎の推薦で中西忠兵衛の道場に入門し、わずか3年で免許皆伝を許されました。

このころ周作は又七郎の妻の姪と結婚して養子となっていました^{めい}が、後に離縁してしまいます。剣法の考え方の違いからともいわれていますが、実際は又七郎に実子が生まれたため、周作が養父を思い、身を引いたということです。離縁後も親戚として付き合いは続いたそうです。

さて、免許皆伝を許された周作は諸国武者修行の旅に出て、いろいろな流派の長短を学びました。

江戸に戻ると、北辰一刀流を唱え、日本橋に道場を開いて玄武館と称しました。門弟が増えるとともに神田お玉が池に道場を移し、江戸随一の道場になりました。

道場の運営には松戸にあった妻の実家から多大な援助があったといわれています。

浅利又七郎に出会ったことが、千葉周作の人生を大きく変えたのです。

◎浦山寿貞の墓と浅利又七郎の供養碑は春雨橋近くの宝光院にあります。



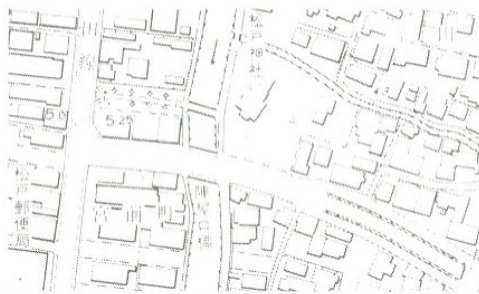
浅利又七郎の供養碑

松戸神社

日本武尊^{やまとたけるのみこと}を祀る松戸神社は、1626年^{かんえい}（寛永3年）に創建され、御嶽大権現^{みけだいごんげん}と称したといわれています。明治15年に松戸神社と改め、現在に至っています。本殿に掲げられている『日本武尊』の額は、有栖川宮熾仁親王^{ありす がわのみやたるひと}の筆によるものです。

水戸徳川家とかかわりが深く、松戸町史の中に次のような言い伝えが書かれています。

水戸光圀^{みとみつくに}が狩りに来たとき、境内のイチョウの木に白鳥が止まっていた。そこで鷹を使ってその白鳥を狩ろうとしましたが、鷹が怯えて飛び立ちません。そこに居あわせた人が、「神社の境内で狩りをすると必ずわざわいがある」と諫めたのですが、光圀は聞かずに弓をとり、白鳥を射落そうとしました。すると弓を射ようとする手が縮み、とうとう矢が二つに折れてしまいました。



驚いた光圀は弓矢を権現社に奉納して帰りました。その後、水戸家は権現社を厚く崇敬し、様々なものを寄進しましたが、江戸時代中ごろ火災によって全て焼失してしまったといわれています。

松戸神社の祭礼日は
10月17日・18日です。

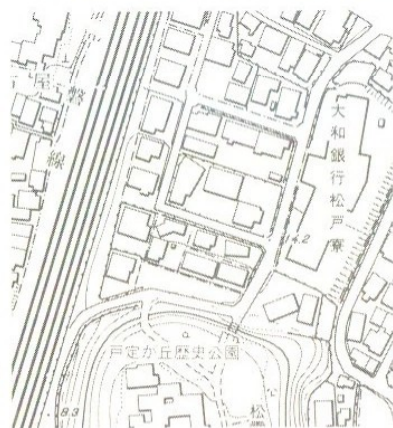


千葉県指定名勝 旧徳川昭武家別邸（戸定館）庭園

(1986年2月28日指定)

戸定邸は1884年（明治17年）に第11代水戸藩主徳川昭武が建てたもので、江戸時代の大名の下屋敷の建築様式を簡略化した木造平屋一部二階建の建物です。芝生の庭に面した客間は書院造りで、旧大名の住いにふさわしい雰囲気をもっています。

庭園には芝生が植えられ、丸く刈り込んだ樹木を配した和洋折衷の造りで、当時としてはめずらしい様式でした。ウメ、サクラ、モミジなど、四季折々庭を楽しむことができ、江戸川やその周辺の田園風景を眺望できるよう造られています。



1951年（昭和26年）に昭武の子息武定氏より邸宅と土地が松戸市に寄贈され、その後戸定館の名称で公民館施設として利用されてきました。

1991年秋には戸定が丘歴史公園として整備し、戸定歴史館も開館しました。

徳川昭武（嘉永6～明治43：1853～1910）

昭武は江戸駒込の水戸藩別邸で、徳川齊昭の十八男として生まれました。兄は江戸幕府最後の将軍となった徳川慶喜です。

齊昭の教育方針から生後6ヶ月で水戸に送られ、剣術、馬術等を兄弟とともに厳しく教育されました。

時まさに幕末、昭武は数え12歳にして京都に向い、在京水戸藩兵の責任者として京都御所南門守備の任につきました。

1864年（元治元年）の禁門の変や天狗党の乱では、兄慶喜を助けて活躍しました。この時期、水戸藩内でも内部対立から藩兵への補給も途絶えがちとなる中、これをよくしのぎ、京都で過ごした数年間は彼の生涯に大きな影響を及すことになりました。

1867年（慶応3年）、昭武は慶喜の名代としてパリ万国博覧会に出席しました。そこで、ナポレオン三世に謁見しました。日本が初めて公式に参加した万国博覧会は、その出品物がヨーロッパの人々に強い印象を与え、ジャポニズム勃興のきっかけとなったのです。

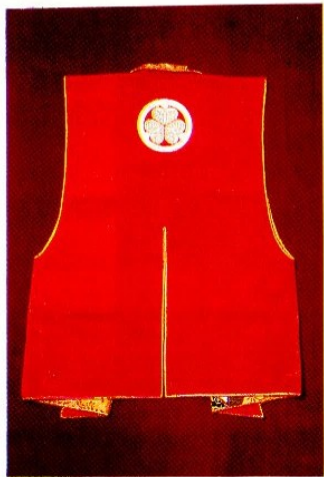
パリでの主要行事を終えた昭武は、ヨーロッパ各国を歴訪し、「プリンス・トクガワ」として新聞に紹介され、次期将軍候補の訪問として報道されました。

歴訪後、パリに戻った昭武は、慶喜の命により留学生活を始めます。そのときの生活はかなり厳しいものであったようで、朝7時の起床から夜10時の就寝まで語学、馬術などの個人レッスンが続けられたそうです。時には音を上げたときの日記に記されています。

しかし、留学生活も長くは続きませんでした。幕府の崩壊とともに



徳川昭武



陣羽織

に帰国命令が届いたため急遽帰国し、水戸藩第11代藩主となりました。1868年（明治元年）11月、昭武16歳の時でした。

廃藩置県の実施により一私人となった昭武は向島小梅の水戸徳川邸に住み、1876年（明治9年）にフィラデルフィア万博御用掛として渡米した後、再びパリで約4年間の留学生活を送りました。

帰国後は明治天皇に仕えましたが、31歳で隠居を決意し、1884年（明治17年）戸定邸落成とともに松戸に移り住みました。

ここで、昭武はかねてからの趣味であった狩猟を楽しむようになりました。松戸に戸定邸を建てたのも、以前からたびたび猟に来ており、猟場が多かったからともいわれています。

1897年（明治30年）になると兄慶喜が静岡から東京に戻ってきました。そして、頻繁に松戸に遊びにくるようになり、昭武と連れだつて狩りに出かけています。多いときは年に十数回も訪れていたようです。

当時の松戸近辺は獲物も豊富で、昭武の日記のなかにはタヌキ、イタチ、カモなど様々な動物の名前が記されるとともに、鉄砲の玉を何発使ったなどこと細かく書かれていました。

兄慶喜の影響や留学経験からハイカラなものが好きだった昭武は自転車も乗り回していました。

また、当時としてはめずらしかった写真も撮り始め、松戸を撮影した写真も数多く残されています。自分の娘達をよくモデルにしていたようですが、今日のカメラと違い撮影に時間もかかり、時とし

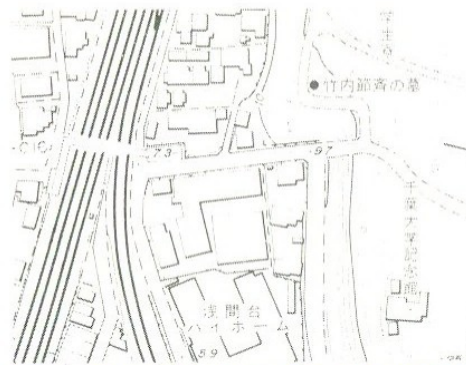
て色々な扮装でモデルをさせられたようで、娘達は渋々モデルを務めたということです。

日頃から病気とは無縁だった昭武ですが、1908年（明治41年）東京の順天堂医院で右腎臓の摘出手術を受けました。退院後、箱根などに旅行したりして元気になったかに見えましたが、1910年（明治43年）病床に伏し、7月3日家族に見守られながら亡くなりました。享年58歳。

幕末から明治へと、日本の変革期を走りぬけた生涯でした。

◎徳川昭武関係資料（松戸市指定文化財）及び松戸徳川家伝来品は戸定歴史館に展示されています。

たけうち ひらく ぶんせい けいおう
竹内 啓（文政11年～慶応3年：1828～1867）



本姓を小川といい、武蔵国（埼玉県）入間郡竹内村の生まれで、生家は代々名主の家柄でした。

若くして江戸に出て、国学、儒学、医学を広く学び、国元に帰ってからは、医者として

働くかたわら、村の子供たちを教えたり、父親の死後、名主も勤めました。

1867年（慶応3年）

11月 下野国（栃木県）出流山で、小川節斎と名乗って尊王討幕の兵



を挙げました。しかし、12月12日から13日にかけての戦いで、幕府の兵に敗れ、現在の茨城県古河市に逃げましたが、捕まってしまう、江戸へ護送されることになりました。

世の中は江戸幕府崩壊による混乱のさなかで何が起ころかわからない状態で、松戸の宿まで来たところで、いつ逃げ出されるかわからないという不安から、節齋は宿内を引きまわされたうえ、現在の千葉大学園芸学部旧正門脇で斬首されました。12月24日のことでした。

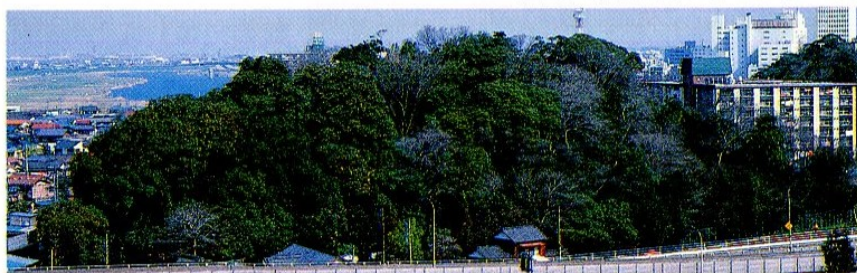
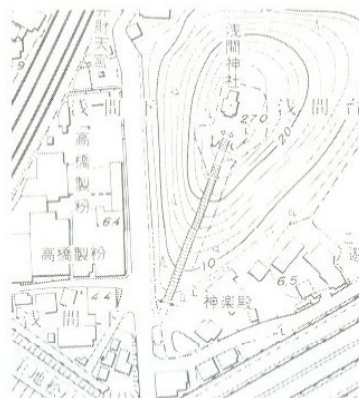
◎節齋の墓は、千葉大学園芸学部旧正門脇の小高い場所にひっそりと建っています。

千葉県指定天然記念物 浅間神社の極相林

(1966年12月2日指定)

浅間神社の極相林は松戸市内でも数少ない安定した植物相を見せてくれる森です。この森が都市化が進んだ今日まで残ったのは神社という信仰の場であつたためと考えられます。

浅間神社は1647年(天保4年)の創建といわれ、富士信仰の神社です。



毎年7月1日の山開きの日が祭礼日となっています。

神社本殿まで登る階段には1合目、2合目といった石柱があり、富士山を模したことがわかります。

極相林

極相林とは、植物の移り変わりの最終の姿で、その変化のことを遷移(せんい)といいます。

植物が何も生えていない裸地(らち)から、やがて草が生えて草原を形成します。次に明るい日差しの中で育つマツなどの陽樹(ようじゆ)の林ができ、林の中に日光が届きにくくなります。

林の中が薄暗くなるとマツなどの明るい場所で育つ樹木の芽生えは成長できなくなります。かわりにアオキ・スダジイなどの薄暗い林でも育つ陰樹(いんじゆ)が入り込み、やがて陽樹と入れ替わって陰樹の林へと移っていきます。

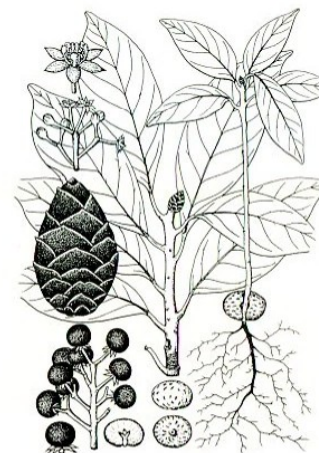
陰樹林になると植物の種類の変化がほとんどなくなり安定した林となります。これが極相林です。

浅間神社の極相林はタブノキ、ヤブニッケイ、ムクノキ等を中心に林を形成しています。特に西側斜面に極相林としての特徴がよく見られます。

タブノキ (クスノキ科)

暖帯性の常緑高木で本州、四国、九州等の暖かい海に近い地域に多く分布し、花は5月頃咲きます。

アオスジアゲハの幼虫が葉を食用としています。





ヤブニッケイ (クスノキ科)

東北地方南部から台湾にかけて分布する常緑高木で芳香があります。6月頃黄緑色の花が咲きます。



ムクノキ (ニレ科)

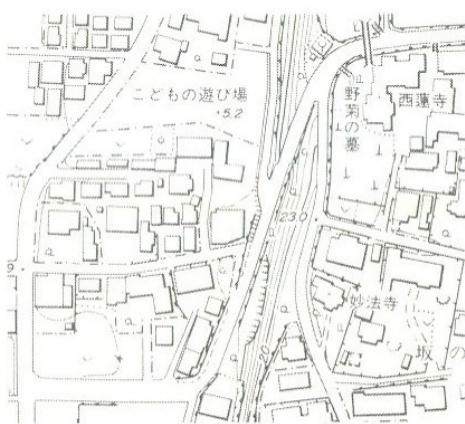
関東地方以南に分布する落葉高木です。4～5月に花が咲き、秋になると実が食べられます。葉は漆器等を磨くのに利用され、材は器具材として用いられています。

(石井信義氏画)

野菊の墓文学碑

矢切を舞台にした伊藤左千夫の「野菊の墓」を記念して小説の一節を刻んだ文学碑が下矢切の西蓮寺にあります。

昭和40年5月9日に伊藤左千夫の五女・由伎氏、左千夫の兄の孫・春木千枝子氏、門人で文学碑の題字を書いた土屋文明氏らが出席して除幕式が行なわれました。



夏目漱石が絶賛した「野菊の墓」は、物語の大半が松戸を舞台にして書かれています。

なぜ矢切を舞台に選んだかについては、春木千枝子氏の著書「歌人伊藤左千夫」

の中で『左千夫は、たびたび本所茅場町から柴又の帝釈天を訪れ、江戸川を舟で渡り、松戸から市川へ出て帰ったことが何回もあり、私の父も同行したことがあるそうである。左千夫は、松戸の矢切辺りの景色を大層気に入ったらしく、腰を下ろしては辺りの景色を眺め、こんなところを舞台にして、小説を書いたら面白いだろうなあと思っていたという。ただそれだけの考えから松戸を選んだと見るのが正しいと思われる。』と書かれています。

当時の素朴な田園風景が詩情豊かな作品を生んだのでしょう。



松戸市指定文化財 西蓮寺の庚申板碑

(1969年4月1日指定)

板碑は石で造られた塔婆で、亡くなった人の供養のために造られたものですが、逆修^{さうしゅう}といって生前に自分の死後の冥福^{めいふく}を願う目的で造られたものもありました。

鎌倉～戦国時代に盛んに造られ、武士から庶民までが造らせていたようです。

15世紀後半からは庶民によって庚申の夜



に徹夜で仏事供養を行なう庚申信仰と結びついた板碑が造られはじめます。

松戸市内では約 200 基の板碑が見つかっており、最古の板碑は弘安年間（1278年～1287年）に造られたものが発見されており、以後約 280年間にわたって造られています。

西蓮寺の庚申待板碑は天文十二年（1543年）の銘があり、高さは 91cmあります。庶民層が集団で造立したことがわかっている貴重な資料です。

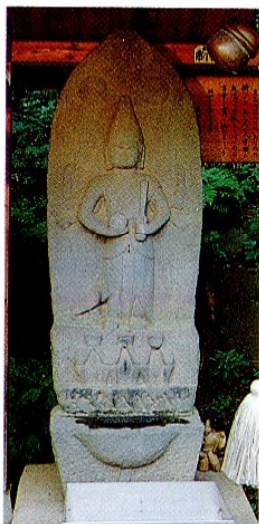
◎西蓮寺の庚申板碑は松戸市立博物館に展示されています

松戸市指定文化財 寛文八年銘庚申塔

（1988年12月15日指定）

庚申塔は、庚申（かのえさる）の夜の庚申信仰に基づいて造られ、青面金剛を主尊としたものが全国的に多数分布しており、松戸市内でも数多く造られています。

矢切庚申塚にある庚申塔は青面金剛を刻んだものとしては市内でいちばん古く、寛文八年（1668年）の銘があります。形は光背型で、中央上部に弥陀三尊種子と日月が刻まれ、正面には青面金剛像、足下に三猿が配されています。



矢切の渡し

大阪の陣のあと徳川家康は江戸防衛に力を注ぎ、利根川水系の街道の要所にも定船場を設け、番所を置いて川を渡ることを厳しく制限しました。現在の松戸郵便局近くにも金町松戸関所を結んだ定船場がありました。

一般の人々は定船場以外で川を渡ることができませんでしたが、近在の農民が農作業のために利用できる幕府公認の渡しがあり、柴又と矢切を結んだ矢切の渡しもそのひとつでした。

農民には寛大であった関所でしたが、一般通行人にとって苦手なところだったようで、関所を通らずに矢切の渡しを十六文で渡ったという資料も残っています。

